

館林キリスト教会 デボーションノート（2009年）

8月 1日 今日の通読箇所 哀歌 3章51～66

「愛と裁き」

エルサレムの滅亡を悲しみながら、一方エレミヤは、エルサレム市民の重ね重ねの罪をも悲しまねばならない。彼等は、神に代わって悔い改めのメッセージを語るエレミヤに対して、ここに記されたようなひどい迫害を加えたのだ。その罪が裁かれなければ神の正義は成り立たず、後代の人々の戒めにもならない。ゆえにエレミヤは彼等の正当な裁きを神に訴えるのだ。キリストも、十字架の愛と救いとともに、悔い改めない罪人の審判をも強調した。天国の教えと共に地獄の教えも、キリストによって完成したと言われるのだ。

8月 2日 今日の通読箇所 哀歌 4章1～10

「荒廃の風景」

この文章を読む年配の人は、戦後の東京の荒廃を思い出さずにいられないだろう。その頃私は高崎にいたが、東京から来る列車には、真っ黒に焼け焦げたような人が飢え疲れ、列車にすがりついて運ばれてきた。東京では、焼け出されてやっと生き残った大人や子供が腹をへらしてふらふら歩いていた。むかしエルサレムの籠城戦に巻き込まれた市民は、飢えのため常軌を逸し、親が子を食べるようなケースも多かったのだ。われわれはいま飽食の時代に生きているが、不敬虔の結果エルサレム市民や、かつての東京のように、再び神の裁きを招かぬよう注意しよう。

8月 3日 今日の通読箇所 哀歌 4章11～20

「亡国の民」

これもまたエルサレム滅亡後のユダヤ人の、悲しい預言の詩だ。エルサレムは何回か落城したが、AD70年のローマ軍による攻撃はもっとも悲惨だった。それ以来1900年間、ユダヤ人は故国を失い、亡国の民として世界を放浪し各地で繰り返し迫害を受けた。この文章は、彼等の運命を絵のように預言している。しかし神のあわれみの時がきて、1948年3月、彼等は故国のパレスチナに帰り、今のイスラエル共和国を建国した。歴史の奇跡と言われるできごとだった。これらが、「聖書が真実の書であるという証拠はユダヤ人だ」と、言われるゆえんだ。

8月 4日 今日の通読箇所 哀歌 5章7～22

「忍耐と希望」

私は聖書学校の卒業生などに色紙を書くとき、よく「神の召しと賜物とは変えられないことがない」というみことばを選ぶ。ご奉仕をはじめてから疑惑に陥らないようにとの祈りからだ。これは、パウロがユダヤ人の未来を書いた「ロマ書11章」の1節だ。選民ユダヤ人に対する「神の召しと賜物」は変わらず、彼等は最後に祝福と使命に回復すると。哀歌に書かれたような当時の彼等の運命を嘆きつつ、エレミヤが彼等の最後の回復の望みを捨てずに祈った、信仰と忍耐とはすばらしい。

エゼキエル書について 解説がある箇所を通読しましょう。

8月 5日 今日の通読箇所 エゼキエル書 2章1～10

「災いの言葉」

1章1～3節に、序言の形で、エゼキエルの預言した時と場所が明記してある。また1章は余りにも難解で交読に適しない。交読は2章から始めよう。ここで神は彼に困難な使命をお与えになった。エレミヤと同時代のことだから、イスラエル人は彼のメッセージを受け入れず、反対にいばら、あざみ、さそりのように彼を迫害するだろう。しかし「彼等が聞いても拒んでも」エゼキエルは神の言葉を語らねばならないのだ。その言葉は祝福よりも裁きの宣告に満ち、語る者にも聞く者にも悲しみと嘆きと災いの言葉なのだが。

8月 6日 今日の通読箇所 エゼキエル書 3章1～15

「ダイヤの額」

心のうちに甘い神の言葉を食らい、出て行ってこれを人々に語る。これが預言者の務めだ。彼はそのメッセージを捕囚されてこの地に来た、ユダヤ人の地域コミュニケーションに語ろうとする。しかし先祖伝来聖書を聞き続け、不服従を続けてきたユダヤ人の心は堅い。その「厚顔で強情な」ユダヤ人に対してエゼキエルは、岩よりも堅い、ダイヤモンドのような額を与えられなければならなかった。恐れずめげず、はばかりず、徹底的に彼等に伝道するように命じられたからだ。伝道に案外、遠慮や気取りが邪魔をすることがある。伝道するためには大胆と忍耐と執拗が求められるのは、昔も今も変わらない。

8月 7日 今日の通読箇所 エゼキエル書 3章12～21

「血の責任」

エゼキエルは神秘的な傾向を持っていた。この日も彼は霊に導かれてテルアビブに行ったのだ。ここで彼は「神のみ旨を知り、しかもそれを語るように託された者の責任」について語る。彼が警告を与えないままで罪人が滅亡した場合には、彼はその滅亡の責任を問われる。彼が注意を与えないために信者がつまづくなれば、指導者はそのつまづきの責任を問われるのだ。「その血をわたしはあなたの手から求める」とは何という強烈、厳粛な主の言葉だろうか。我々は今改めて、伝道の義務に対して忠実であることを祈りたい。

8月 8日 今日の通読箇所 エゼキエル書 4章1～17

「象徴的行為」

昔の子供は、駒を使ったり絵を書いたりして、敵陣を攻める遊びをした。エルサレムの滅亡を思い、かつ語りながら、エゼキエルはそれをやってみたり人にも見せて警告したのだろう。また彼は苦しい「片寝」を続け、配給の粗食を食べわずかな水を飲みながら（その水も最小限の配給）エルサレム滅亡後の人々の苦しみを、先に実験したのだ。多くの預言者はよく「たとえ話」を使ったが、彼の場合は特に神に命じられて、こんな「象徴的行為」で人々を警告した。これも彼に与えられた特別な使命だったのだ。

8月 9日 今日の通読箇所 エゼキエル書 5章1～12

「焼かれる毛髪」

イスラエル人にとって、髪の毛やひげを剃るのは、犯罪人や捕虜だけが受ける恥辱の印だった。エルサレムが罪のために恥辱と滅亡を受ける前に、エゼキエルは例の象徴的行為で、そのことを強烈に預言し、警告することを命じられたのだ。剣で撃たれ、風に散らされ、火に焼かれる毛髪（その焼ける匂いは人体の焼ける匂いそのものだ）。彼は泣きながらそれをしたろう。ライス博士は説教中よく泣き「滅亡の説教は、泣かずには話せない」と言った。

8月10日 今日の通読箇所 エゼキエル書 6章1～10

「偶像の季節」

夏になるとお祭りやお盆で日本は偶像の季節だ。彼等は何となく昔からの習慣の通り、偶像に「国家安穩」「五穀豊饒」などを祈っている。しかし偶像が祈りに答えることも保護や祝福をもたらすこともない。戦争中には神社もお寺も焼かれ、ある場合はその境内も死体で埋まったのだ。イスラエルもなかなかこれを悔い改めずついに滅亡した。日本人も何やかや言いながらその状態は改まら

ない。やがて主の裁きの日に、偶像の前に死体が累々と横たわるのを、恐れなければならないのに。

8月11日 今日に通読箇所 エゼキエル書 7章1～13

「難解な預言書」

エゼキエル書は難解で親しみにくく、多くの人にとってなじみの少ない預言書だと思う。実は旧約の専門家のつもりの私も、この預言書はまだしっかりと読んでいない。しかしこの交読の機会にみなさんと一緒に、たとえ一通りでも通読できるのは感謝だ。この章のメッセージは激しい。エレミヤよりもエルサレムの滅亡が近いからだった。この旧約最高の激しい発言も、象徴的な行為や多くの神秘的な異象と共に、エゼキエル書の特徴をなすものだ。長い預言書ゆえゆっくりと読んで行こう。

8月12日 今日に通読箇所 エゼキエル書 8章1～14

「空中飛行」

イスラエルの末期には、ここに記されたような偶像礼拝が神聖な神殿で行われたらしい。もしエゼキエルの情報がなければ信じられない、恐るべき事態だ。彼等に対する神の怒りと裁きもやむを得ないと思われる。エゼキエルは神の力による神秘的な方法で神殿の内部を視察したが、これは彼が物理的に空を飛んでいったのか、靈的にそれを経験したのか分からない。何回も言ったが、エゼキエルは神秘的な経験に富んだ人だ。これも神の特別な賜物で、どの預言者もそうだった訳ではない。

8月13日 今日に通読箇所 エゼキエル書 9章1～11

「まず聖所から」

ある者は偶像礼拝にふけり、ある者はそのありさまを悲しみ嘆く。神はその実情を知っていたもう。エリヤの時代の「バアルに膝をかがめない七千人」のように、裁きのみ使いは彼らに印をつけ、裁きの日に彼等が救われるように準備をするのだ。いまもみ使いは同じような準備をしているだろう。それにしてもその準備が「まずわたしの聖所から始めよ」と命じられているのはきびしい。我々クリスチャンも教会員も、うかつにははいられないのだ。

8月14日 今日に通読箇所 エゼキエル書 11章1～12

「鍋と肉」

10章はあまり難解なので交読を省略する。11章で預言者は、神殿の東正門の広場に集まった25人以上の指導者の会議の様子を記している。彼等は「町

が破壊されて家を建て直すような事態は起こらない。エルサレム城は堅固なごと鍋のようだ。鍋は強い火の熱を調整して、中の肉をちょうど良く煮えるくらいに守るのだ。だからこの市民は安全だ」と言っている。しかしエゼキエルは「実は罪の満ちたエルサレムは肉を煮る鍋のようだ。その中の累々たる肉こそは、バビロンの攻撃によって殺される市民の死体なのだ」と言う。または彼等はそこから取り出されて諸外国でも捕囚の恥を受けようと。

8月15日 今日に通読箇所 エゼキエル書 12章1～20

「実感と預言」

いかに主のご命令だとは言え、エゼキエルが荷物をまとめ、これ見よがしに夜逃げをする様子を見て、エルサレム市民は驚きまた不快を禁じ得なかったろう。彼等は罪を犯しつつ、また主の警告を聞きつつ、なお神を侮り、自分たちの安全を期待してのんきに暮らしていたからだ。彼はまた捕虜として連れ去られる旅中の人のように、戦々競々としてパンを食べ水を飲んだ。別に演出をしたわけでもないが、神の警告を信ずる彼は、やがて来るその恐ろしい場面を実感できたのだろう。「実感」これは口先だけの、決まり文句の、マンネリ説教者に対する警告でもある。

8月16日 今日に通読箇所 エゼキエル書 13章1～16

「水増し預言」

エゼキエルの時代にも神の言葉を語ると自称する偽預言者がいた。彼等は神のお示しを受けないのに、自分の心のままに預言し、また預言者の義務をも怠っていた。戦いの時には引っ込み、工事に際しては怠けている。彼等の働きは、塀を築く時「水しっくい」を塗るようなものだという。本来しっくいは、粉末にした石灰石に粘着剤を混ぜるのだが、手抜きして水だけのしっくいを塗れば、その塀は嵐に遭うと崩れてしまう。偽預言者の奉仕は「水増ししっくい」のようで、人の救いにも教えにも役に立たない。それは神の保証と祝福を伴わない空しいものだからだ。

8月17日 今日に通読箇所 エゼキエル書 13章17～23

「占いの女」

[17～19節]にあるように、当時のイスラエルには、占いや口寄せをし、人の禍福のために祈る女が多くいて、神に背き人の生活と魂を害する業務に従っていたらしい。その大げさで思わせぶりで芝居がかりな仕方も、ここに描写されている。彼等は人の悩みや迷いにつけ込んでそれを餌とし、自分の利益を計るのだ。それは結局「偽りをもって正しい者（迷信的だが積極的な悪人ではない）

の魂を悩ます」事になる。当然、彼等は神の裁きを受けるのだ。

8月18日 今日に通読箇所 エゼキエル書 14章1～11

「偶像と躓き」

捕囚地のイスラエルの長老がエゼキエルのもとに集まった。もちろん神の祝福の言葉を求めるのだ。エゼキエルは言う。「あなた方は偶像を持ち、また罪のつまずきになる物も所持しつつ、悔い改めてそれを除こうとはしない。それなのに真の神が彼等に祝福の言葉を与えるだろうか。それゆえ神みずから裁きをもって彼等に答えるだろう」悔い改めを勧めない当時の一般預言者を当てにする者は、預言者もろとも裁かれる。しかしそれは、人々が真の神がどういうお方かを知り、やがて霊的に回復し、本当の祝福のもとに約束の地に安住するようになるためなのだ。

8月19日 今日に通読箇所 詩篇91篇1～16

「めんどりの羽」

これも一つの「旅人の詩」で、神の様々な保護が、形容のかぎりを尽くして歌われている。人生は、昼は歩き夜はテントに寝る昔の砂漠の旅行に似ている。そのコースには盗賊の襲来、飛来する矢、戦争、疫病、事故、ライオン、毒蛇、あらゆる危険が横たわっている。神はめんどりがその温かい羽の下に雛を守るように、我々を守って下さる。しかも主の救いと、主の臨在と、主の教えと、長寿と、光栄をもって我々を満ち足らせて下さるのだ。

8月20日 今日に通読箇所 詩篇92篇1～15

「神殿ストリングス」

「十弦の琴」はアソールといい、いとすぎやびやくだんなどの木を組立て、羊の腸の弦を張った一穂のリラ。「立琴」はキノールで、ダビデがサウル王の前で奏でた小型の琴だ。「琴」は大型のハープで、低音が良く出たといわれる。この詩篇は吹奏楽器をいれなくて、弦楽器の演奏で歌われたのかもしれない。エルサレムの神殿では安息日の礼拝ごとに、これらの楽器の合奏によって神様に賛美の歌が捧げられたのだ。

8月21日 今日に通読箇所 詩篇93篇1～5

「威光の衣」

垂れ込める密雲。激しい雨。恐ろしい雷鳴、電光。果てしなく広く、また時には狂 怒涛の渦巻く海。ある場合これらは「神の威光の衣」である。人はこれらによって神を恐れ、また同時に神を崇めるのだ。神がヨシエアを雷火とひよ

うをもってお助けになり、宗教改革者のルターが道で雷雨に会い、親友が撃たれて即死するのを見て、その恐怖から悟仰に志したのも有名な話だ。

8月22日 今日に通読箇所 詩篇94篇1～15

「社会正義」

世に「社会正義」が行なわれず、いわゆる「悪い奴ほどよく眠る」状態は、昔から人間共通の悩みだ。しかし我々クリスチャンはこれにもあまり深く心を煩わせない方がいい。長い目で見ると、いわゆる「天網かいかい、粗にして漏らさず」で、案外神の正義は地上でも行なわれる。また終末再臨の日には、すべての事実は明らかになって裁きが行なわれ、神の正義は全うされる。「裁きは神に委ねよ」とはそのことだ。

8月23日 今日に通読箇所 詩篇95篇1～11

「礼拝の詩」

高い山、深い谷。広大な海、荒涼たる砂漠。それらを造られた神を拝するのが礼拝だ。その時われらの祈りは教会に閉ざさされず、宇宙の神に昇って行く。しかもこの神はわれらの牧者だ。それゆえわれらの思いは今日の生活の現実に拘束されず、信仰をもって牧者なる神を見上げる。また礼拝において神はわれらに語りかけ、われらは「神の声」を聞くのだが、その時「神の声」に対してわれらの心は頑なでないように。

8月24日 今日に通読箇所 詩篇96篇1～13

「再臨の詩」

「主は来られる」「主は王となられた」そして「天は喜び地は楽しむ」13,10,11節これらの言葉で、主の再臨の詩であることは一目瞭然だ。その時「新しい歌を主に向かって歌え」「聖なる装いをして主を拝め」1,9節。などの天使たちの声は世界に響き渡るのだ。何とすばらしい勝利と自由に満ちた礼拝の朝だろう。このはっきりした未来の希望こそが、あらゆる試練の中で、クリスチャンの信仰を最終的に支える力なのだ。

8月25日 今日に通読箇所 詩篇97篇1～12

「心の王位」

「主は王となられた」という句で始まるこの詩篇も、テーマは主の再臨だ。と共に我々の心の王座に主をお迎えする意味にも読める。救われる前の我々は、神様を締め出して、自分と自分の欲望を心の王座につけていた。しかし救われたとき初めて主を心の王座にお迎えすることができた。そしてその時から、「正

しき人よ、主によって喜べ」といる、すばらしい新生活が始まったのだった。

8月26日 今日の通読箇所 詩篇98篇1～9

「義の勝利」

「主は勝利を得られた。その義をあらわされた」主の敵はサタンでありまたサタンから出て人を滅亡に落す罪である。神は罪人を義とし滅びを免れさせ、祝福を与えて下さるが、もしそれだけだったら、神は罪に対してルーズで人間に対しては甘いといわれるかも知れない。ロマ書3章に、キリストの十字架によって神は罪人を義とし、また同時にご自身の義をも全うせられた、とある。これこそが主の真の勝利なのだ。

8月27日 今日の通読箇所 詩篇99篇1～9

「祈りの勇士」

ここに指導者モーセと祭司アロン、士師サムエルと3人の人物が挙げてある。いずれも神に仕え、祈りに力ある人物だったことは「彼らが主に呼ばわると、主は答えられた」とあるのを見てもわかる。彼らは自分のためでなく、イスラエルの運命をいつもその双肩に荷ない、執り成し手として主の前に立ちふさがっていた。神は常に彼らの祈りに答え、イスラエルに祝福を注いで居られた。実に彼らは主の知己だったと言える。本当に光栄ある3人だと思う。

8月28日 今日の通読箇所 詩篇100篇1～5

「奉仕と喜び」

「喜びをもって主に仕えよ(2節)」。熱心な奉仕者と話し合うとき、いつも聞くのは「教会の無報酬の奉仕は、会社の仕事と違って不思議な喜びです」という言葉だ。自発的で自由な、喜びに溢れたその奉仕こそ、主のみ心であり、また主がこの地上にみ業を行うために、強く期待したもう教会の力なのだ。これが即ち「主ば教会の頭で、教会はその手足だ」と言われるゆえんだと思う。

8月29日 今日の通読箇所 詩篇101篇1～8

「主の公義」

「私は直き心をもって、家のうちを歩きます」ダビデは一家の家長であり、同時に一国の王であった。神に代わって一家、一国に「主の公義」を行うのが彼の務めだったのだ。それ故、家の中の個人的な生活でも、神の前に謹みと正しさをもって行動し、その身をもって家族にも国民にも「主の公義」を示すように心がけたのだった。「上のなす所、おのずから下これに習う」といわれる。父たる者、指導者たる者の責任は重いといわなければならない。

8月30日 今日の通読箇所 詩篇102篇1~18

「落込みの祈り」

作者は落ち込んだ時にこの詩篇を作ったようだ。だから落ち込んだ時にこの詩篇を読むとそれだけで慰められる。なぜなら、それは自分の心境を偽らず飾らず神の前に申し述べた祈りだからだ。「心の低いものとともに住みたもう神」は、この祈りに耳を傾けるられる。そして折りは次第に信仰の励ましに導かれ、最後には「主を誉め称える」に至るのだ。詩篇は実に賛美と祈りの聖書だ。しかもその中に、苦しい祈りと賛美が多いと言われるのもまた本当だ。

8月31日 今日の通読箇所 詩篇103篇1~14

「賛美の詩篇」

「落込みの詩篇」の後に「賛美の詩篇」が続くのもみどころだ。「さあ神を賛美しよう」と自分に呼びかけ自分を励ますこの有名な詩篇は、いつ読んでもすばらしい。「イスラエルの賛美の中に住みたもう神」という言葉もあり「主を喜ぶことは汝等の力なり」という言葉もある。賛美は我々の魂の力、そしてサタンに対する勝利の力なのだ。これに対して「つぶやきは実行的無神論だ」などと言われるのも、尤もだと思う。